音楽に取り憑かれた Jean Rhys

Voyage in the Dark の音楽にみる Anna の「旅」

近野幹結

私は人生を通してポピュラー音楽に取り憑かれていた。いくつかの曲が頭の中を流れて目が覚めたり、曲に合わせて歩いたり、話したりした（そしてそれらを歌いながら身辺を整理したりもした）。言い過ぎかもしれないが、それに非常に近い状況だった。多くの人がそのような経験をしているのは知っているけれど、彼らは私のように音楽に取り憑かれているのかしらと疑問に思う。私の人生は、その時々に愛していた歌を見出しにして、セクションごとにきちんと分割できるのではないかと思ったりもする。
（“Songs My Mother Didn’t Teach Me”）

未出版のエッセイ“Songs My Mother Didn’t Teach Me”でこのように書き残しているように、Jean Rhys（1890-1979）は音楽の人であった。イギリス領ドミニカ出身の Rhys は、植民地出身者として、また、女性として、イギリスで生き抜く厳しさを赤裸々に綴った作家である。自伝的性格の強い Rhys の小説には、「音楽に取り憑かれた」彼女らしく、多くの音楽的描写が登場する。Rhys は音楽を巧みに用い、彼女自身が生きた時代を鮮やかに描き出しているが、彼女の作品を音楽的視点から論じる研究は未だ少ない。本発表では特に詳細な音楽描写に富む *Voyage in the Dark*(1934)について考察した。

Rhys 自身の 1910 年代の経験を題材にした本作は、クレオールの Anna Morgan がイギリスでコーラスガールから売春婦へと堕ちていく様を描く。本作には、出版直前まで *Two Tunes* という題がつけられていた。Anna が冒頭で語るように、彼女にとって、暖かく明るいカリブ海の故郷と薄暗く冷たいイギリスはまさに異なる「二つの旋律」であった。だが、Rhys は両者を本当に混じり合わないものとして描いたのだろうか。幼少の頃から自身が白人であることを嫌い、黒人になりたいと切望してきた Anna だが、故郷の黒人社会は白人である彼女を受け入れることはなかった。一方、白人社会を象徴するイギリス社会も諸手を挙げて Anna を迎え入れるわけではなかったが、イギリス社会で生きていくために彼女はその白人社会へ馴染まざるを得ない。Anna の白人嫌悪、黒人羨望、そして白人社会に受け入れられる必要性との間の確執を、Rhys は音楽によって巧妙に表現する。作中の音楽は、ヨーロッパ音楽、アメリカポピュラー音楽、植民地音楽の大きく三つのジャンルに分けることが出来、それぞれは Anna の人生における三つの分岐点と連鎖して奏でられる。

本作における最初の重要な展開は、貧しいコーラスガールの Anna がイギリス人 Walter Jeffries の愛人となるまでである。イギリスに一向に馴染むことの出来ない Anna は、自らの肉体を差し出すことで Walter から経済的、精神的安定を得る。つまり、Walter に受け入れられることは白人社会で生きていく保障となるのだ。この Anna の「白人化」は彼女の周りに流れる音楽にも顕著に表れる。Walter と会食するレストランでは、オーケストラが「Puccini や、次に何が起こるか常に知っていて、曲の続きが先んじて聞こえてくるような類の音楽」（*VD* 31）を演奏し、Walter による資金援助で移り住んだ部屋の外からは、老人たちが “Nearer, my God, to Thee” や “Abide with me”、“The Girl I Left Behind Me” を演奏しているのが聞こえてくる（*VD* 34-35）。特に、ここで老人たちが演奏する三曲は全てイギリス由来のものであり、Anna がイギリスに溶け込んでいくことをまるで祝福するかのように奏でられるのだ。極め付きは、Walter の勧めで受ける歌のレッスンである。黒人のように「歌を歌っているような声」(*VD* 56)を、Anna はレッスンを通して矯正していく。しかし、Walter が一方的に愛人関係を終わらせ、Anna の「白人化」は頓挫してしまう。

この挫折から、知人である白人 Ethel との関係がこじれ、売春婦として生きながら、妊娠が発覚するまでが第二の重要な展開である。ここでは、アメリカのポピュラー音楽、ragtime に熱狂する当時のイギリスが鮮明に描かれる。Ragtime は、白人と黒人の異なる二つの音楽文化を融合させた「全く新しいタイプの音楽」であった(Belsh and Janis 8)。しかし、次第にその「黒人性」に反感を抱く音楽批評が現れ、また、商業化が加速するにつれ、白人が黒人ミュージシャンを搾取する経済的格差も広がっていく。一見、音楽的には融合を目指しつつも、人種間の壁が完全に取り除かれることはなかったのだ。この ragtime の限界は、自身の内で白人と黒人のアイデンティティがせめぎ合う Anna のイギリス白人社会への融合の限界と共鳴する。

妊娠によって再びイギリスの白人社会に溶け込むことに失敗した Anna は、非合法の中絶手術を受ける。術後、朦朧とする彼女の頭の中に流れるのは、故郷の黒人たちが演奏していたカーニバル音楽の音色である*(VD* 156-57)。カリブ海諸島の故郷は Anna がイギリスに渡る前のイノセンスを象徴し、この植民地音楽への回帰は

彼女のイノセンスへの強い回帰願望を表している。現行版では、意識を取り戻した Anna の売春婦としての人生がこれからも続いていくことが暗示される。しかし、注目すべきは Rhys が「唯一考えられるエンディング」(*Letters* 35)と執着し続けたオリジナルエンディングである。ここでは、蓄音機から流れるカーニバル音楽が止まると同時に Anna は息絶える。Anna の解放を切に願う Rhys が描く本来のエンディングにおいては、人生のループから抜け出した Anna は無音の世界に旅立っていくのだ。

Kenneth Ramchand は *Voyage in the Dark* を「最初のネグリチュード小説」(Ramchand 3)と位置付けた。ネグリチュードとは、Aimé Césaire や Léopold Sédar Senghor をはじめとするパリに留学していた黒人学生たちが先導した「黒人が世界での己の地位を理解しているという認識と、この認識が黒人の芸術的表現と政治的願望に浸透させる反乱」(Beti and Tobner 6)である。ネグリチュードはこれまで黙殺されてきた黒人の声を世間に響き渡らせることを可能にしたが、Jean-Paul Sartre は、それが白人的価値観への対抗手段として存在する限り、黒人の真の解放の一過程にすぎないというネグリチュードの限界を指摘した。つまり、ネグリチュードを普遍性へと昇華させるには、自己消滅しか道はないのである(サルトル 197-201)。この Sartre の指摘から影響を受け、ネグリチュードからの脱却を目指した Frantz Fanon は、黒人が人種問題から解放されるためには、「他人が私の周囲にでっち上げたこの不条理なドラマを飛び越え、共に受け入れ難い双極を斥け、特殊的人間を通じて普遍を目指すこと」(ファノン 123)以外に方法はないと主張した。彼は、ネグリチュードが固執する「白と黒」という西洋思想的二項対立を乗り越え、「全的人間」を目指す必要性を説いた。

Ramchand が述べたように、Anna の最終的な植民地音楽への回帰は、白人性を拒絶し、黒人性を再認識するネグリチュードの姿勢と重ね合わせることが出来るだろう。しかし、Rhys が元々構想していたエンディングにおいて、植民地音楽の途絶えた無音の世界へ消滅していく Anna は、黒人性の賛美というよりはむしろそれを超越した段階に昇華していったと考えられるのではないだろうか。さらに、Anna の「旅」において、白人性と黒人性の融合を目指す ragtime のピリオドがあったこと、彼女自身が両者の融合体になり得た可能性を無視することは出来ない。また、Rhys はこの可能性を示唆する一方で、Anna の挫折を描くことでそこへの到達が困難を極めるものであることも強調している。人種的普遍性の実現困難に直面したからこそ、Rhys は最終的に Anna を無音の世界へと解放したのだ。

以上の考察を通して、*Voyage in the Dark* では、三つの音楽ジャンルが黒人性と白人性が衝突する Anna のアイデンティティ探求の道程と共鳴して奏でられていたことが明らかとなった。その中でも、白人社会で自立しようと奮起する Anna の背後で流れるラグタイムと、最後まで執着し続けた本来のエンディングで無音の世界に旅立つ Anna を Rhys が描いたことを踏まえると、黒人性を強調する同時代のネグリチュード思想よりも一歩先の、人種を超越しようとする彼女の姿勢が浮かび上がる。白人でもあり、黒人でもある曖昧な存在の Anna だからこそ、両者の融合に最も近づき得たのである。さらに Rhys は、後に Fanon が目指したような人種を超えた境地への可能性を Anna に託しつつも、それを理想として留めるのではなく、実現化に伴う困難をも描いたのである。Rhys は、ただ「不快」で「陰鬱」(*Letters* 25)な社会に打ちのめされた若い女性の悲劇的人生を描いたのではない。Anna の「旅」と呼応する音楽の軌跡を辿ることで、人種を乗り越える普遍性を模索する Rhys の「旅」が明らかになるのである。

Work Cited

※本文における和訳は、日本語訳版があるものに関しては原文を参照しつつ、日本語版に適宜変更を加えたものである。日本語版がないものからの引用は拙訳によるものである。

Belsh, Rudi, and Harriet Janis. *They All Played Ragtime*. Sidgwick and Jackson, 1958.

Beti, Mongo, and Odile Tobner. *Dictionnaire de la négritude*. L'Harmattan, 1989.

Fanon, Frantz. *Peau noire, masques blancs*. Seuil, 1952. [『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武・加藤晴久訳、みすず書房、1998 年。]

Ramchand, Kenneth. Preface. *Lonely Londoners*, by Sam Selvon, Longman, 2001, pp.3-21.

Rhys, Jean. "Songs My Mother Didn't Teach Me." University of Tulsa Special Collection.

---. *Jean Rhys Letters*, 1931-1966. Edited by Francis Wyndham and Diana Melly, Viking, 1984.

---. *Voyage in the Dark*. 1934. Penguin, 1969.

---. *Voyage in the Dark* (original ending: Part IV). University of Tulsa Special Collection.

Sartre, Jean-Paul. "Orphée noir." Preface. *Anthologie de la nouvelle poésie nègre et malgache*, by Léopold Sédar Senghor, Presses universitaires de France, 1948, pp. VIX-XLIV [「黒いオルフェ」『シチュアシオン III』鈴木道彦・海老坂武訳、人文書院、1964 年、159-207 頁。]